

わが母国、旅の断章

山崎 佳代子

片道切符でユーゴスラビアへ渡り、サラエボで留学生生活を始めたのは一九七九年の一〇月。ベオグラードに移り住み、三七年の歳月が流れた。内戦で多民族国家ユーゴスラビアは解体し、私の住む国の名はセルビアとなり、日本語と日本文学を教えて三〇年が過ぎた。この節目に、初めて半年を京都で過ごし、ふたたび母国と出会った。

ツツジに彩られていた六月の桂坂は、一月には紅葉で麗しく、風が冷たい。虫の声も、鹿の切ない声も鎮まった。久しぶりの母国の半年。様々な人々、土地、舞台や絵画との出会いは、至福の時であった。平安神宮の初夏の薪能の炎、蕪村の眠る金福寺の木漏れ日、祇園祭の華麗なる峻巖。奈良の橘寺の古池、不退寺の樹木や草花。そして晩秋の京都、高桐院の松向軒の茶室の渋柿色。退蔵寺の僧如拙の瓢鮎図や金持院の長谷川等伯の猿猴捉月図。そして岡山の国吉康夫の「祭りは終わった」……。走馬灯のように情景が巡る。

日記帳を拡げ、小さな旅を記しておく。

一月二日

青空の朝、上田市に着く。上田電鉄は単線、小さな電車で塩田町へ向かう。車窓には山脈が青々と連なり、田畑が沿線に広がり、住人を失ったらしいアパートが、時折、現れた。塩田町からバスで森の入り口へ、そこから歩いて無言館へ向かう。

ドイツの日本学者ヴォルフガング・シャモニ氏が、無言館を必ず訪ねるようにと、手紙をくださったのは一〇月の初め。戦没画学生の作品を取めた美術館。父のアルベルト氏は画家で、無言館でもその作品が展示された。丁寧な手作業で本をつくるチェコの出版社のために、数多くの書物の挿絵を手掛け、カフカの作品に挿絵を描いたほか、ゲーテを感動させたセルビアの口承文芸のバラード「ハッサン・アガの妻の悲歌」(KLAGGESANG der edlen Frauen des Asan Aga: 一九三二年刊)などにも挿絵を添えた。しかし、第二次世界大戦が勃発、ナチズムの嵐に、画家アルベルトは東部戦線(ウクライナ地方)へ送られ、不帰の人となった。

小高い丘の上の無言館、窓から弱い光が流れ込み、若い画家たちが遺した作品が静かに呼吸する。順路の最初は、左手の壁の二枚の油彩。静岡県浜松市出身の中村萬平氏の遺作である。力強い裸婦の油彩「霜子」、画家の妻の像。もう一枚は、画家の自画像で、眼鏡の奥に意志の光を秘める。妻は暁介を出産した後、他界。妻の死を戦地で知った萬平も、満州の野戦場で病死、享年二七歳。父の遺した二枚の絵が、暁介の「父母」となった。

展示作品のうち、戦争を直接に主題としたのは「飛行兵士立像」と海で炎上した船の絵くらいで、作品の多くは、恋人や妻、姉妹、祖母や母を描いたものなど女性を描いていた。故郷や都会の風景、家族、自画像。それゆえに、過酷な時代が明らかになっていく。ガラスケースには、召集令状、絵筆や絵具、家族と交わした手紙、絵筆、戦死の報告に関する書類などが、控えめに時代を伝える。

アルベルト・シャモニの作品は、長い廊下に展示されていた。明るい庭から、緑の光が流れ込む。描かれた動物、植物、子ども。熱いお茶をいただき、カップで両手をあたたため、自由、夢という言葉を思い出していた。

一月三日

朝の代沢。電車で東村山市へ向かう。空が広々と明るい。新宿を過ぎるころ、電車は空いて、数人の乗客と陽光だけを乗せて走った。東村山市からタクシーで丸木原爆記念美術館へ。田畑が広がり、柿の木の実が光る。広い道を右へそれると、丸木夫妻の棲んでいた家が現れ、美術館は隣にあった。

最初の展示室は、丸木スマの作品。野菜、猫、草花がのびのび描かれ、心が洗われる。

次の空間からが、位里と俊の原爆の図。屏風画という伝統形式に、精密なデッサンで描かれた人々の群像が、仏教美術に様式化された朱の炎に包まれていく……。光を抑えた暗い画面の闇から、深い声が聞こえてくる。作品ごとに、俊が文章を添えていた。絵では表現しきれぬものを言葉で記さねばならぬほど、丸木夫妻が引き受けた課題は重い。

だが闇に一筋の微かな光を与えるものがある。それは美しさということ。命を失った肢体が折り重なり、樹木の枝にも息絶えた肢体が逆さに吊るされている。だが傷は暗示されるだけで、衣服を失った裸体は、均整がとれて神々しい。美しさとは、尊厳ということ。

「原爆の図」の連作の「救出」。裸体の傷を連想させるのは赤い色だけ。どの顔も気品がある。燃えさかる火を象徴する赤い空間から、静かな光に満ちた白い空間へと、疲れ果てた人々が移動する。担架に瀕死の者を乗せた男たちが先頭を行き、キツネ色の野良犬がうなだれている。赤と白の境のあたりに、若い父親が赤子を抱き、観る人を見据えるように、姿勢を正して立っている。逃れていく人の列の後方には、母と娘であろうか、正座して合掌している。「救出」に淡い光を与えるのは父の眼差し、母娘の両手だった。「救出」は、祈りだった。

窓のむこうに、都幾川が穏やかに光りながら流れていく。都幾川は、位里の生まれ故郷、広

島の太田川の上流の情景に似ている、と聞く。水は、遠い土地を繋いでいた。

一月二二日

早朝、広島へ向かう。「あなたは詩人だ。必ず、広島に行きなさい」。九月終わり、T先生がおっしゃった。行かなければならなかった町。初夏のような日。駅から路面電車に乗る。二人の姉妹と身体の弱い弟。母親が地図を確かめている。イタリア人らしい若い二人の旅人……。相生通りを行き、紙屋町交差点をすぎると、原爆ドーム前の駅に着いた。

視界に黒々と焦げた壁面が入ってくると、身体が震えた。荘厳……。見上げると、原爆ドームは青空を仰いで立っている。傍らにエノキの大樹が枝を拡げ、黄金の葉が陽光に、はらはらと舞い散っていく。赤茶けた鉄骨が、天空を切りとる。ドームの傍らを、元安川が流れる。ヒドリガモが水に潜り魚を探す。河岸をゆく人々に、急ぐ者はない。ベビーカーに眠る赤ちゃんを乗せたヨーロッパの家族は、語り合いながら通り過ぎていく。

ドームの柵の前に、青や緑のフェイルが置かれ、自由に手に取っていい。原子爆弾投下に関する詳しい資料を収め、戦後の水素爆弾の実験の記録もある。ドームの木陰で、語り部が、母が被爆したという山を指さし、友達らしい人に当時の話をしていた。スペイン語、中国語、韓国語、英語、露語、仏語、独語など異国の言葉、そして日本語。異国の旅人たちが、フェイルを拡げ熱心に読んでいる。「この河ね、みんなが逃げてきたというのは」と、女の声がある。橋を渡った。

千羽鶴が飾られ、鐘がある。湯川秀樹の言葉、「平和を地に空に」が刻まれているというが、ここから見えない。原爆資料館を訪ねた。黄色い帽子の小学生、紺色の制服の中学生に混じり、抑えた光のなかで「物」たちは語る。子どもの眼差し、子どもの沈黙。

あの八月の朝は、建物疎開があり、学徒動員で作業に出た学童も犠牲となった。ガラスケースの中には、遺品があつた瞬間を伝える。真っ黒に焼け焦げた弁当箱。破れた木綿のズボン。桃色の袖なしワンピースは、江木千鶴子（当時一歳八か月）が着ていた。国鉄の切符の日付は八月六日。六〇〇メートルほどの高さで爆弾は炸裂。閃光、熱風……。地面の温度は三〇〇〇度から五〇〇〇度。熱さは想像を超える。

資料館の長い廊下は、秋の光に満ちている。高校生たちと、録画された被爆者の言葉に耳を傾ける。「それは白い、白い光。マグネシウムを一度に焚いたようでした。芋畑をぐぐりぬけ、みんな泣いておりました。みんな火傷。不思議で、不思議で、火事もないのに火傷。私はお寺で育ったから、小さなころから地獄絵は見えていました。あれは地獄の絵、地獄のとおりでした。赤色、黒、茶色と三色だけ。緑がないことだけが違った。いろんな声を出して人々が泣き叫んで、怒り狂うような炎でした。」と、一人目の女性。「うめき声、泣き声、叫び声。顔ではわからないから、衣類で見ている。四つの人々の山の死体。あの朝、おはよう、と言って、それから光った。きれいな、きれいな光。それからすべてがみんな真っ赤に燃えていた。桜も、柳も燃えていた。火の海」と、二人目の女性。「歩いていくと、焼け焦げた電車があつた。ステップに上がる。一五、六人が折り重なって死んでいる。撮ろうと思った。だがカメラのシャッターが切れない。裸で焼けただれて亡くなった人々を、撮れなかった。あの日は、夕方まで町を歩き回り、とうとう一枚も撮れなかった」と、写真家の男性。

それから原爆供養塔へ向かう。身元の分からぬ七万の霊が眠る。裏に回ると左手に、小さな石塔があり文字が刻まれている。宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ……」だ。

橋を渡り、船を待つ。午後三時半、宮島へ。カモメに見送られ、旧太田川から広島湾に入る

と波は高まり、午後の陽光に無数の青い島影が現れ、次々と重なっていく。この海で、古の人々は神々と出会った。あの朝、神々は、どこにいらっしやったのか。

宮島は満潮。山は紅葉が深まっていた。海岸を歩き、石段を上り、豊国神社を訪ね、そこから海を見渡す。あの日の海は、どんなにざわめいたことか。石段をおりて厳島神社にむかった。長い回廊を行くと、最初に客（まろうど）神社がある。神の名の響きの美しさ。能の舞台がある。闇を照らす炎も役者も無いが……。薄闇から敵かに朱色の鳥居が浮かび上がり、細波に光がさざめく。宮島をあとにし、船で宮島口へ向かった。

宮島口から山陽本線で広島へ。電車は混みあう。小さな姉妹に席を譲る。姉が、「真っ赤な秋」を歌うと、妹も小さな口を一生懸命に動かす。ふと、原爆資料館の花模様のワンピースが想いに浮かんだ。広島駅に着く。姉妹の母は、私に礼を言い、女の子たちが元気に手を振る。小さな家族の無事を祈るように、小さな旅が終わった。

ベオグラードに戻るための荷造りを終え、トランクに鍵をかける。芭蕉の言葉を思い出した。「旅にして旅をすみかとする」。新しい旅が、また始まる。夜の桂坂。私は、森に耳を傾けていた。

（ベオグラード大学教授）